

難治水の肱川で進めた流域治水活動 ～四半世紀にわたる活動の軌跡～

肱川流域会議 水中めがね (愛媛県)

1. 肱川流域会議 水中めがね

私たちが生きる「肱川流域」は、成熟社会の到来に伴い、多種多様な問題や困難を抱えています。太古の昔より豊かな生活の恵みを与え続けてくれた肱川も例外ではありません。

今、住民一人ひとりが、肱川の現状を十分に把握し、肱川及び肱川流域の将来を真剣に考え、行動に移していかなければならない時期にきています。

「肱川流域会議 水中めがね」は、故郷である肱川とその流域について熱く語り、自分たちに出来ることから少しでも活動の輪を広げ、《森》・《川》・《海》を合言葉に、環境と共存共栄の出来る流域が一体となったサステナブルな地域社会を目指し、市民、企業、行政が相互にパートナーシップを持ちながら展開していく街づくり(グランドワーク・トラスト)を実践することを目的に1999年9月に設立し、令和6年で25周年を迎える団体で、現在200名を超える会員が在籍しています。

肱川流域のことに興味を持っている人々の情

報や思いを出し合うことで、課題や可能性について理解を深め、尊重し関係者間の友好を築き上げ、「肱川流域人」として「いい肱川」を次世代に残すことを目指して運動しています。

2. 将来を見据えた肱川流域での様々な活動

肱川は愛媛県最大の河川であり、中流の大洲盆地から河口に向け両岸が狭窄し、河床勾配も極めて緩やかであることなどから水災害を受けやすい宿命的な地形です。加えて、気候変動による自然災害の激甚化への備えが急務です。

肱川の源流から河口までの現状把握に努め、流域の小中高校に出向いて様々な自然災害等の勉強会(例えば、肱川流域高校生フォーラム等)を行ってきた他、出水頻度の高い肱川の原風景である植物の生えないレキ河原の再生活動などを通じて「自然豊かな肱川流域を引き継ぐ思い」を次世代の地域の子供達に伝えていきます。



このように、当会は、安全・安心な生活と、自然豊かな肱川流域の環境との共存共栄を図るため、流域に暮らす市民・企業・行政が相互に協力し、流域が一体となった地域社会を目指し、国が主導する流域治水施策にはるかに先駆け、様々な活動を行ってきました。

(1) 水政策の合意形成における行政と住民とを繋ぐ橋渡し役を担う活動

行政主導で進める水政策ではあるものの、流域住民の理解なしでは政策は進みません。流域に生まれ、暮らすものの価値観と行政の水政策を融合させ、迅速に効果的な対策を講じるためには行政から独立し、流域住民の感覚で説明することが必要です。四半世紀にわたり、流域全域で顔の見える上下流交流などを通じて流域住民の思いを理解・汲み取り、行政へ伝え、意見交換することで、両者を融合させる取り組み（合意形成）を行ってきました。

代表的な活動は次のとおりです。

①上下流交流「だんだん肱川」～肱川流域学講座～

「だんだん」は大洲弁でありがとう。より良い流域環境を目指し、上流も下流も同じ肱川流域にすむ「肱川流域人」としてお互いを思いやる意識を醸成させることが重要であるという観点から、平成16年度から平成31年度まではほぼ毎年様々な取り組みを実施してきました（令和元年度からは新型コロナウイルス感染症により休止）。

■肱川流域高校生フォーラム

肱川の将来を担う流域内全10校（当時）の高校生（代表）が集まり、防災について意見交換を複数年にわたり実施しました。自助・共助・公助の観点で議論し、高校生自らが流域に潜在するリスクを発掘しました（平成23年度～25年度）。



写真 流域全体の将来やリスクを踏まえてまちづくり構想する高校生



写真 過去の水害について、伝承者から真剣に話を聞く高校生

■菜の花畑でだんだん肱川（平成28年度～30年度）

「だんだん肱川」をはじめ長きにわたり交流を継続している大洲市内の大洲農業高校の、肱川流域内外の住民の交流の場であった「菜の花フェスタ」を自らの手で復活・継続したいとの思いに賛同し、「菜の花畑でだんだん肱川」を高校生との共同で実現。



写真 菜の花畑でだんだん肱川

②河川管理者との定期的な意見交換

平成30年西日本豪雨を受けたタイミングなど適宜河川管理者と肱川流域の将来像について意見交換を実施しています。



写真 意見交換の様子

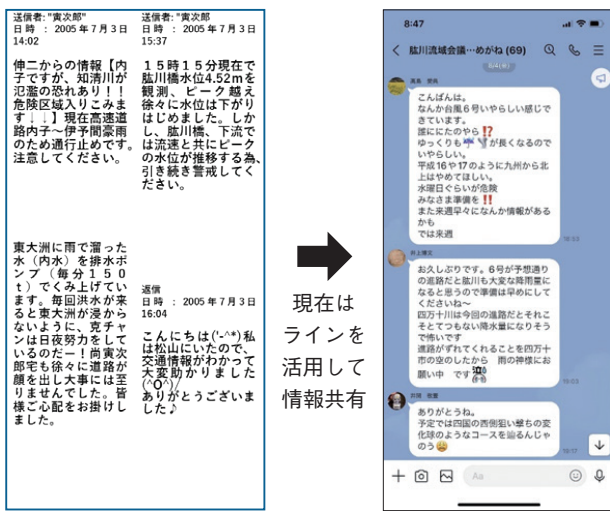
(2) 流域住民の防災感度の向上につながる活動（地に足をつけた防災活動）

行政主導の治水対策が進んでも様々な危機は訪れます。住民が防災情報の意味を自ら理解し、前広に必要な対応をとるための防災感度を向上する取り組みを流域全体で行っています。

主な活動は次のとおりです。

①めがね速報

防災メールの先駆け。発・受信者双方向の情報共有（顔が見える情報の交換）を目指しています。



②例会（1回/月）での治水勉強会

四半世紀・293回（R6年3月現在）にわたる例会と幹事会において治水勉強会を実施し、防災情報の理解に努めています（R6年9月に300回例会を開催予定）。



写真 治水勉強会の様子

③肱川流域を理解する（知る）ためのフィールドワーク

次世代を担う高校生を始め、幅広い年齢層と一緒に実際に流域内に出かけ、肱川流域を理解する（知る）ための取り組みを実施しています。

また、肱川で実施された水防演習に参加し、会員の防災意識の向上に繋げる活動にも力を入れています。

さらに、平成30年西日本豪雨被災後は、流域内で痕跡調査を独自に実施し、被災経験を次世代に繋ぐ活動を実施しました。



写真 高校生との源流ツアー



写真 水防演習への参加



写真 平成30年西日本豪雨後の痕跡調査の様子

(3) 次世代へ誇れる風土・景観の再生と伝承

肱川は、幾度となく氾濫をしている難治水の河川である一方で、豊かな文化・恵みを育んだ我々の母なる河川です。かつて清流と呼ばれた肱川は、河道内の草木繁茂や土砂堆積により見る影もなく荒れ果てた時期がありました。なかでも、流域の象徴とも言える大洲城下の真っ白な石河原は密林化していました。また、誇りうる文化財周辺に流入する川ゴミが目立っていました。人海戦術による除草のみならず会員企業の力を借りた大規模な機械力を活用した環境整備や細やかな人手でなければ対応できない美化活動など、対象に応じた取り組みを進めています。風土・景観を再生することは、結果として洪水時の流下能力の向上にも寄与しており、流域治水にも寄与することに気がつかされました。

主な活動は次のとおりです。

①大洲城下のレキ河原再生（肱川の前風景の再生と流下能力向上の取り組み）

河原の前風景再現のため民間企業ボランティアによる大型重機を用いた葦ヨシの除去を実施しました。



写真 レキ河原再生前



写真 レキ河原再生後

②河川等における清掃活動

組織の名前である、「水中めがね」には、「川の中から見てみよう」という思いを込めています。その活動の原点は、綺麗な肱川で自ら実践することでした。評論家として川を語るのではなく、自ら実践することを重要視し

ています。流域内の様々な清掃活動への参加のみならず、自らも清掃イベントを企画し、20年以上にわたり継続しています。

■臥龍淵の清掃

「持続可能な観光地」世界一位となった大洲観光地のシンボルの一つである景勝地臥龍山荘付近の洪水後の漂着ゴミを、筏を使って住民と一体となり除去を適宜実施しています。



写真 臥龍淵の清掃の様子

■肱川・矢落川の清掃

肱川は、全国の他の河川と同様に一斉清掃は実施されていますが、「肱川流域会議水中めがね」では、肱川における治水面・環境面での課題はどのようなものなのか、皆で話し合い、肱川流域の各地を清掃しながら見つめ直す活動を継続しています（23回継続）。

また、大洲平野を流れる肱川支川の矢落川は、肱川合流部付近において完成堤防と比べ一部区間を低くした暫定堤防があることから大洪水時に外水が溢れ始める治水面での課題や、水質が悪く、かつ、ゴミが非常に多い環境面での課題がありました。この矢落川についても、清掃活動を継続しています（21回継続）。

■年末ゴミノケーション（年末大清掃）

高速道路網の整備により、大洲市までのアクセスが向上・交通量の増加する一方、沿道のゴミの増加が目立つようになりました。ゴミの増加により、水郷大洲は景観悪化・イメージダウンするだけではなく、そのゴミは肱川を通じ、海へと流れていくことになります。

特に年末年始は、高速道路を利用して帰省する方々を綺麗な街で歓迎したいことから、伊予大洲インターチェンジ付近において、毎年クリスマス前の土曜日に道路・河川沿いの清掃を継続しています（23回継続）



写真 肱川清掃

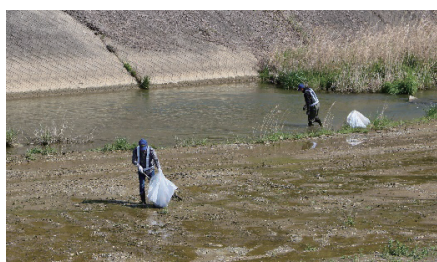


写真 矢落川清掃



写真 ゴミノケーション（年末大清掃）

3. 四半世紀にわたる活動の成果

肱川流域の治水は、施設整備やダム操作規則の変更により微妙に変化する上下流の治水安全度のバランスを丁寧に確保しながら進める必要があります。地域ごとの利害を超え、流域全体での最適解を見出し、より迅速にこれを実施するためには行政だけではなく流域住民による主体的かつ利他的な活動が必要です。

私たち肱川流域会議水中めがねは、流域における課題解決のためには、現状と課題を正しく理解した上で、最適解に向けて上下流一体となった合意形成を行うことが最重要と考え、活動を進めてきました。

結果として、河川整備計画の策定（H16年）とその後の状況を踏まえた改定（R1年）、河口～中流域の長大な連続堤防や宅地嵩上げなどの対策、国土交通省のダム計画の3度にわたる見直しなど、他の流域では見られないようなスピードで上下流バランスを確保しながら流域住民が求めている河川整備が進められ、治水安全度の向上が図られました。

これは、流域住民の理解と行政の柔軟な判断に加え、私たち肱川流域会議水中めがねの四半世紀にわたる活動によるものと自負しています。

今後も、肱川流域の上下流交流に感謝し、この活動を続けていくことで、当会の目標である後世に「（100年後も）いい肱川」を残すことに繋がられると考えています。

我々の活動は、今後も河川行政・流域治水に寄り添えるものであると考えます。

4. 100年後の「いい肱川」を目指して

肱川流域会議水中めがねでは、上下流、市民・企業・行政、老若男女などの交流を介して流域住民の思いを如何に理解・汲み取ることができるか、流域内の行政vs民間の構図からの打開のため、行政の思いを理解し、如何に民間に伝えるか、四半世紀の時間と293回に及ぶ会議（幹事会・例会）（R6.3月末時点）を通し、議論・活動してきました。

最初は少ない人数から始め、理解者、協力者を増やすことに苦慮しましたが、流域には、様々な文化や考え方があり、それらを尊重しながら活動することが重要だと認識させられました。

その中でも、肱川流域の次世代を担う流域全ての高校生（代表）に参画いただき、自然災害・水環境について流域全体の事として議論できたことは有意義でした。

「平成30年西日本豪雨で被災した肱川流域」、「コロナ渦で活動が制約を受けた肱川流域」において、「だんだん肱川」の再開、流域人交流の活性化など、肱川流域会議水中めがねの活動を今後も継続発展し、100年後も「いい肱川」を目指し活動をしてまいります。

難治水の肱川で進めた流域治水活動
～四半世紀にわたる活動の軌跡～
肱川流域会議 水中めがね